
それは偽りの月のように。

境 鏡介

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それは偽りの月のように。

【NZコード】

N48881D

【作者名】

境 鏡介

【あらすじ】

2人の女子生徒が階段から転落した。ただの事故なのか。何者が突き落としたのか。それとも『5時55分の怪人』の仕業なのか。不快感解消の為に、栗栖智奈は動く。クリスチーナ軍曹シリーズ第2弾。

プロローグ：作戦会議

「自分は反対です！」
と、クリスチアーノ大佐こと栗栖知亞乃は、テーブルを叩いて言った。

「落ち着きなさい、大佐？ 理由をいいたまえ」と、栗栖平ハ郎准将は大佐を聞いたました。

大佐はショートヘアの髪をかきあげて、「明日は自分は帰還が遅いので、作戦に参加できません。作戦を数日見送ることはできませんか？」

「なるほど…。数日か」

と言つて、准将は腕を組むと、上官の指示を仰いだ。

「中将。どうされますか？」

部屋の明かりは消されているが、テーブルの上有る電気スタンドには明かりがついており、人々の顔を照らしていた。電気スタンドの明かりが届かない暗闇で、時計の音が規則的に時を刻んでいた。栗栖麻紀中将は数秒の沈黙の後、「…軍曹は3日後、定期試験10日前になります。軍曹は、試験の10日前から試験対策を行うことは皆さんご存知のとおり。ですから、出撃は明後日にすれば問題ないでしょう」

「明後日ならば参加できます」と、大佐が安堵の表情で言った。

准将は、大佐の言葉に頷いて、「では中将。作戦決行は明後日に決定でよろしいですか？」

中将は両肘をテーブルにつき、組んだ指の上に額をのせて、「では明後日。我々は当モンブラン基地から『夜桜』に出撃。総員、全力で作戦を遂行せよ。以上」

「Yes, sir！」

准将と大佐は敬礼をして言った。

「…よし。じゃあ、電気つけといい?田舎へなつちやうか?」
と、麻紀は立ち上がりながら言った。

部屋の明かりがつけられ、『会議室』は『リビング』に姿を変えた。

「じゃあ、智奈とトーファも呼んでくるから」と、知亜乃も立ち上がりながら、「お父さん、今度から智奈達も参加させたら?」

「しかしながら、トト官がないほうが雰囲気が出るから」そう言いながら、栗栖は電気スタンドを消して、「麻紀ちゃんもそう思つだらいい。」

麻紀はテレビのリモコンを手にして、「参加してもいいんじやない?平ちゃん。外食の場所くらい、みんなで決めましょ?」
と、呆れ顔で言った。

第1章・陽は落ちて月は昇る

「ノート貸して！」

火曜日。ホームルームが終わり、帰り支度をととのえていた栗栖^{クリス}智奈^{チナ}に近づくと、柿崎^{カキザキ}咲子^{サキコ}は両手を合わせて言った。

智奈は咲子を見ずに机の中身をバックに移しながら、「…彼氏と遊んではばかりいるから、毎回テスト前に慌てることになるのよ。自力で頑張りなさい」

「そんなに冷たいこと言わないでよ」

と、咲子は手を合わせたまま、「それに、『今の』彼氏になつてからは、まだテスト受けてないし」

智奈は竹製の30cm定規で肩を叩きながら、「なにそれ。自慢[?]」

「違うよ。事実」

智奈達のやり取りに気づいた桃川もみじ（モモカワ モミジ）が、机の間を縫つて2人に近づいた。

「どうしたの？」

「咲がノート貸してくれって」

と、智奈が答えた。

もみじは咲子を見て、「あれ？ 危ないの世界史だけじゃなかつたの？」

と、訊いた。

「…化学も危ないんだ。同じ人から2教科分のノート借りるのは、私の良心が許さないし」

「『小心』の間違いじゃない？」

そう言ってから、智奈はバックから化学のノートを取り出して、「明日の昼休みまでよ。期限厳守」

「助かった！ ありがとう。これでなんとかなりそう」

咲子は智奈からノートを受けとると、ウェーブのかかった黒く長

い髪をかきあげた。

「じゃあ、帰ろうよ」

と、もみじが眼鏡のレンズ越しに2人を交互に見て、笑顔で言った。

智奈は定規をバックに突っ込んで立ち上ると、「どこか寄つていく？」

「糖分が欲しい！」

と、もみじが言った。

「『B TRAIN』（ビー・トレイン）でも行く？」

「賛成！」

「悪いけど、私はバス。先約があるの」

と言つて、咲子は意味あり気に微笑んで、また髪をかきあげた。

「最近付き合い悪いよ？」

と、もみじが拗ねたように言った。

「違う『お付き合い』の方が忙しいのよ」

と、咲子は悪戯っぽく笑いながら、「付き合いはじめが肝心なのが上手くまだしていかないと、ね」

翌日。智奈が席につくと、もみじが興奮した様子で近づいてきた。

「ねえ、智奈聞いた？」

「おはよう。聞いたって何を？」

と、智奈はバックの中身を出しながら訊いた。

「昨日、咲が階段から落っこちて入院したんだって！救急車も来たって！」

智奈は眉をひそめて、「嘘でしょ？」

「本当だつて！見た人に聞いたんだよ？」

そう言って、もみじは丶サインを智奈の目の前に突き出して、「

救急車が2台入ってきて、咲が担架に乗せられてたつて！」

智奈は、ポニーテイルにしている髪をいじつて、「2台っなんで

？」

「それがね…」

そう言いながら、もみじはずり落ちそうな眼鏡を抑えて、「もう1人。別の階段から落つこちたんだって。2年生だつたつて。この人の方が重症らしいよ」

「同じ日に？珍しいわね」

「そうでしょ？これはやつぱり、『5時55分の怪人』の仕業よ！救急車が来たのが6時半くらいだったから、時間的にもばつちり！」

と、もみじは大真面目な顔で言った。

智奈は呆れ顔で、「あんたは本当に噂とか迷信とか好きよね。今時、学校の『不思議なんて流行らないわよ？』

「でも、そういうのつて、あつたほうが素敵じゃない？」

と、もみじは笑顔で言った。

智奈はため息をついて、「…入院したら、そんなこと言ってられないわよ。きっとね」

第2章・月光は道を照りす

智奈達の通う高校から、バスで10分程の所にある病院のベッドの上で、パジャマ姿の咲子は大袈裟にため息をついた。

「全治1ヶ月だつて！『冗談じゃないわよ』

「でも、元気そうでよかつたよ」

と、もみじがほつとした様子で言つた。

「そうね。鼻とか潰れてるのかと思つてたよ」

と、智奈は咲子の左足のギブスの長さを測りながら言つた。

咲子は、智奈の定規を取り上げて、「顔と携帯だけは守りきつたの」

「自分で足を滑らせたんでしょう？誇らしげに言わないでよ

と、智奈は肩をすくめて言つた。

「それがね、違うの」

咲子は、そう言いながら髪をかきあげた。

「突き飛ばされたのよ。誰かにね」

「嘘つ！」

冷蔵庫の中をあさりながら、もみじが大声を出した。

「もみじ、声が大きい」

と、智奈はもみじをたしなめて、「足滑らせたのが恥ずかしいからって、嘘はいけないわよ。エイプリル・フールには早すぎるし？」

「嘘じやなって。本当なの」

と、咲子は定規をもてあそびながら言つた。

「詳しく聞かせてよ」

と、咲子の見舞い品のプリンを配りながら、興奮した様子でもみじは言つた。

「…図書室から出た後だつたの」

と、プリンのフタを開けて咲子は言つた。

「咲が図書室？珍しい」

と、もみじは目を丸くして、「読書の秋だから？」

咲子は軽く手を振つて、「違うよ。彼氏の趣味。読書家なのよ」

「読書家？咲子にしては珍しい」

と言つて、智奈はプリンを口元に運んだ。

「咲はスポーツマンが好きだつたじゃない」

「付き合つて、知つたのよ。スポーツマンで読書家だったの」と、咲子は答えた。

「文武両道？」

と、もみじは訊いた。

「ロマンチストよ」

と、咲子はうんざりした様子で、「モノクロ映画のラブ・ロマンスしか観たこと無いんじゃないかなって、思つことがあるわ」

「それで、図書室で逢い引き？」

「…違うけど。似てるかも…」

そう言つて、咲子は言葉を曖昧に切つて、恥ずかしそうに顔を伏せた。咲子の様子を見た智奈は、悪戯っぽく微笑むと、「どうします？桃川さん。恐らく、他人に言つのもためらうから」の恥ずかしいことしますよ？」

「そうですね、栗栖さん？柿崎さんは、確実に恥ずかしがつてますからね。期待ができますよ」

そう言つと、もみじは眼鏡を押さえて、「柿崎さん。どうして、図書室に行かれたのですか？」

咲子はプリンを口に運びながら、投げやりな口調で、「本。誰も読んでなさそうな本の中に、待ち合わせの場所とか時間が書いてあるメモが挟んであるの。事前に、メールでどの本に挟んであるのか知らされてね」

「キャー！」

と、もみじは叫んで、「警報よ！恋愛空襲警報！」

「恋愛爆撃機来襲！非戦闘員は速やかに退避せよー！」

と、智奈も声を張り上げた。

「上官殿！敵軍は恋愛焼夷弾を使用しています！被害は甚大です！」

「話が脱線したから、本題に戻るわよ」

と言いながら、咲子は定規で軽く智奈達の頭を叩くと、「とにかく、私は図書室を出て、階段に向かったの。途中でメールが来て、そのメールを見てる間に階段について。階段を降りようとしてたときも、携帯の画面に集中してたから、後ろに誰かいるのに気づかなかつたのよ」

「それで、ドンッ？」

と、もみじは突き飛ばすジェスチャーをして言った。

咲子は無言で頷いて、スプーンをくわえた。

「…何にせよ、同じ日のほぼ同時刻に2人も落ちたのはひっかかるわね。…それにしても」

言葉を切つて、智奈は眉間にシワを寄せた。

「頭にくるわ。どこかの誰かのせいで、今日の昼休みまでにノートが返つてこなかつたんだから」

「智奈、顔恐いよ。元々しかめつ面なんだから、自重しなよ」

と言つて、もみじは楽しそうに笑つた。

第3章・時には月が素隠れ（前書き）

サブタイトル、内容一部変更しました。

第3章・時には月が雲隠れ

咲子を見舞いにいった日の翌日の放課後。智奈は眉間にシワを寄せて、夕陽に染まつた階段を見下ろしていた。

「智奈。顔が恐いよ。どうしたの？」

と、もみじは智奈を見て、悪戯っぽく笑いながら言つた。

「…何回言えば分かるの？」日酔いよ」

と、目だけをもみじに向けて智奈は言つた。

「一日中、不機嫌だったもんね。男子が恐がってたよ」

智奈はもみじの言葉に応えずに、視線を階段に戻した。

「…ここよね。咲が落ちた階段つて」

「そうだよ。本校舎。2階。東端の階段。咲から聞いたじゃない」

智奈は左手を手すりに添えて、ゆっくりと階段を降りはじめた。

もみじも智奈に続いて階段を降りた。

踊り場に降りると、智奈は持っていたバックからはみ出していた定規を抜き取り、階段の段の縦の長さを測りだした。

「何cm？」

と、もみじはしゃがみこんで訊いた。

「…24・5cm」

そう言って、智奈は定規で肩を叩くと、「…意外に短いわね」

「気がすんだところで私の話、聞いてくれる？丸1日かけて私が

仕入れてきた話！」

智奈はもみじを睨みつけると、「…聞いてあげるから、大声出さ

ないで」

「了解」

そう言って、もみじは眼鏡のツルを人差し指で撫でながら、「咲と同じ日に落ちた生徒だけど、名前は奥山秋子。オカヤマ アキコ2年4組。この先輩が落ちたのが、西棟の2階。西端の階段ね」

「…たいした情報力ね」

そう言って、智奈は立ち上がった。ゆつたりと階段を昇りながら、「…つまり、同じ日に、同じ階から落ちたってわけね？」

「そう。しかも、奥山先輩が落ちた西棟って、渡り廊下で繋がつ

てるじゃない？」

「…そうね」

智奈は階段を昇りきると、廊下に立つて、まっすぐに伸びている廊下の果てを睨みつけた。

もみじは、智奈に近づくと、「つまり！この直接上の西端と東端の階段で、2人の人間が『5時55分の怪人』の被害にあったのよ！」

智奈はもみじを睨みつけて、「…聞いてあげるから大声出さないで、つて言ったでしょ？」

「了解」

智奈達は廊下を西棟に向かって歩きはじめた。

「奥山先輩ってね、口が軽いことで有名だったらしいよ。2年生の女子の間では常識だつて」

と、もみじが左手に並ぶ教室を眺めながら言った。

「…なるほどね」

と、智奈はトイレを右手に見ながら言った。

「それでね、奥山先輩は合唱部なの。落ちた日も部活で残つてたんだつて。休憩時間の間に落ちたみたいで、時間が過ぎても帰っこないから、合唱部の同じクラスの人人が捜しにいつたんだつて」

「…それで見つけた、と」

「うん。でも、救急車をよんだのは別の人。西棟つて、理科室とか音楽室とか、特別な教室ばっかりじゃない？一番最初に気づいたのは、美術室にいた美術部だつて。他にも科学部とかパソコン部とか、西棟に残つてたつて」

と、図書室を横目に見て、もみじは言った。

「…奥山先輩、頭を打つたみたい。まだ意識が戻つてないらしいよ」

「…なるほど。奥山先輩は重症。西棟には人がたくさんいたつてわけね」

そう言って、智奈は本校舎と西棟をつなぐ渡り廊下の上で足を止めた。智奈は窓の外に目をやった。

黄昏がグラウンドのサッカー部の影を長く伸ばしていた。智奈は激しく動く影法師達を見つめながら、呟いた。

「…多すぎるわね。容疑者が」

第4章・夜の獣は木陰を好む

「とにかく、話を整理しようよ。私、よく分からなくなってきたから」

『喫茶店』“B”TRAIN（ビー・トレイン）の奥の窓際のテーブルにつくと、もみじは智奈に向かつて言った。

智奈はバッグを空いている隣の席に置くと、「…そうね。でも、オーダーを先にすませてから」

「いらっしゃい」

と、『“B”TRAIN』のマスターが水の入ったグラスを銀色のトレイに載せて、智奈達のテーブルに近づいてきた。

「…私達の貸し切りみたいになつてるわね？」

そう言つて、智奈は客のいない店内を見回した。店内には大きすぎない音量で『イツツ・オンライン・ア・ペーパー・ムーン』がかかっていた。

マスターはグラスを置きながら、「ついさっきまで混んでたんだよ。タイミングが良かつたね」

「日頃の行いがいいからね」

と、もみじは笑顔で言つと、「マスター。今かかつてる曲、いいね」

「ありがとう。…注文は？」

「…オレンジジュース」

と、智奈は答えた。

「私、ダージリンとチョコバナナパフェ」

と、もみじは答えてから、「他にお客さんいないんだから、いつもより綺麗に盛りつけてね」

「…努力するよ」

そう言つて、マスターは頬を搔きながらカウンターに戻つた。

もみじは、バッグからノートと筆箱を取り出して、何も書かれて

いないページを開いた。

シャープペンシルの芯を出しながら、「とりあえず、見取り図で

も描こうか。実際に動き回るより分かりやすいと思うよ」

「じゃあ、私が描くわ。もみじが描くと線が曲がるしね」

そう言つて、智奈はバックから定規を取り出した。

もみじは拗ねたように頬を膨らませて、智奈にノートとシャープペンシルを押しつけた。

智奈は定規とシャープペンシルを構えて、「じゃあ、まずはどこから描く?」

「それじゃあ、グラウンドがある側から描こなよ」

「…南側? 分かった」

と、智奈は応えた。

もみじは目を閉じて、眼鏡のツルを人差し指でなでながら、「えつと、一番東端の教室が2年5組。西に向かつて、次に2年4組。続いて3組」

「2組、1組。続いて図書室。本校舎はここまでね」

と、智奈は定規とシャープペンシルを絶え間なく動かしながら言った。

「うん。それから渡り廊下を渡つて、西棟だね。左 方角だと南かな? に曲がると、美術室。更に進むと美術準備室。突き当たりがパソコン室」

と、もみじは目を閉じたまま言った。

「左に曲がらずに進むと、すぐに行き止まりね。右手 北側ねには階段がある、と。この階段が西端の階段。奥山つて人が落ちた階段ね」

「そうだよ。それにしても、東端から西端まで、時間でどれくらいかかるんだろうね?」

「歩いて1分18秒。人によるから誤差は±2秒ってところね」と、智奈は即座に答えた。

もみじは目を開けると、驚いた口調で、「どうして知ってるの?」

さつき、計つてなかつたよね？」

智奈は顔を上げずに、「高校に入学した初日に計つたのよ。…本当に距離も測りたかったんだけど。私の持ってるメジャー、5・5mまでしか測れないの。それで時間がかかるって。途中で先生に見つかって、止めさせられたのよ」

もみじは目を丸くして、「…智奈は『計つたり』、『測つたり』、

『量つたり』するのが本当に好きだよね」

「生まれつきね」

と、智奈は応えてから、「次は北側を描かないと。また東端からでいいよね?」「…

「うん。でも東側つて、ほとんど窓しかないよね?」

と、もみじが智奈に訊いた。

「…そうね。東端と西端、2年2組の正面に階段

「2年3組の正面にトイレ。それと、西端の階段の横にもトイレ

「そうね。それぐらいしかないわね」

と、智奈は線を引きながら答えた。

「よしそー終わり」

と言つてから、もみじはカウンターを見やつた。

「…マスター?パフェ、まだ?」

マスターはホイップクリームを片手にカウンターから顔をのぞかせて、「もう少しで出来るよ。悪いね、時間がかっちゃつて」

「別にいいよ。それよりも、マスター。さつき流れてた曲。なんて名前?」

「さつきつて、いつだい?」

「私達が来た時にかかるた曲」

マスターは、低くうなりながら、カウンターの下にあるオーディオをいじった。

流れていた曲が止まり、やがて違う曲が流れはじめた。

「…この曲だね?」

「…そうーなんて名前なの?」

と、もみじは少しの沈黙の後に答えた。

「『イツ・オンリー・ア・ペーパー・ムーン』って曲だよ」と言って、マスターはカウンターにあつた紙製の丸いコースターを、自分の目線の高さに掲げた。

「…紙で出来た月でも、もしもあなたが私を信じてくれるのなら、本物の月になるだろう…。って歌詞がついた曲さ」

「へえ。随分とクラシックな言い回しね。でも、曲の感じは好きよ」

と、もみじは曲に聴き入っているような表情で言った。

智奈はポニー・テイルをいじりながら見取り図を眺めていたが、ふと気がついた様子で、「クラシックなラブ・ソングで思い出したけど、咲の彼氏のこと何か知ってる?」

と、もみじに訊いた。

もみじは得意気な表情で微笑むと、「咲の彼氏は前田慎吾。マヤダシンゴ 2年5組。サッカー部。実力、学力共に中の下つてところらしいよ。見た目がいいから、女子からの人気はあるって。でも、私の情報網だと咲が初めての彼女みたい。…少なくとも高校に入つてからは、だけどね」

「…その前田つて人と、奥山つて人は接点はあるの?もちろん『親しい』意味でね」

「どうして?」

と、もみじが不思議そうに訊いた。

「仮に、奥山先輩と前田先輩が以前 もしくは現在『親しかった』とする。そして、奥山先輩が突き落とされたと仮定すれば、咲と奥山先輩を突き落としたのは十中八九、同一人物ね」

と、智奈はポニー・テイルをいじりながら言った。

もみじは、眼鏡のツルを撫でながら、「…つまり、嫉妬つてこと? 前田先輩に好意を抱いている人物の」

「ありきたりかもしないけどね」

と、智奈は軽く頷いてから、「…もしくは『5時55分の怪人』

の仕業、じゃないの？」

もみじは残念そうに首を振ると、「残念だけど、それは無いの。

『怪人』が出るのは美術室じゃない？美術部がいたんだから、『怪人』に犯行は無理」

智奈は肩をすくめてから、「とにかく、私は明日の放課後にでも咲に話を訊きにいくわ。あの日気づいたこととか、前田先輩の交友関係とか。ノートも返してもらわないといけないし」

「じゃあ、智奈独りで行つてくれる？私は情報収集に専念したいからさ」「ひら

そう言つてもみじは楽しそうに笑つて、「奥山先輩と前田先輩の関係、絶対見つけてやる

「…お待たせ」

と言いながら、マスターはテーブルに近づいた。

「私の最高傑作だよ」

そう言つと、マスターはパフェをもみじの前に置いた。もみじは真剣そうな眼差しで、パフェを眺め回した。

マスターは、智奈の前にオレンジジュースのグラスを置くと、陶器のポットでティーカップに紅茶を注いだ。

「…どうだい？出来映えは？」

と、カップを置いてマスターは訊ねた。

もみじは視線をマスターに移して、「…いつもと変わらないよ？」

「よく見てよ。バナナが1本多いだろ？アイスも、生クリームも、いつもより多めだよ？」

と、マスターは落胆した様子で言つた。

「そ、うなんだ。ねえ、智奈。どう思つ？いつもと、変わつて見える？」

智奈はパフェを見ずに、オレンジジュースのグラスを睨みつけて、

「…テキーラ・サンライズに見える」
と、答えた。

第5章・昼の獣は灯りを好む

『“B”TRAIN』での『作戦会議』の翌日の放課後。智奈は咲子の病室にいた。

「…よく覚えてないわ。メールの返事、書いてたしね」

と、病室のベッドの上で、西口に田を細めたパジャマ姿の咲子は言った。

「何も見なかつた。何も気がつかなかつた、つてことはないでしょう?」

と、智奈は立ち上がり、病室のカーテンを閉めると言った。カーテンで夕陽が遮られ、代わりに蛍光灯が病室を照らした。咲子は手を額に当て、瞳を閉じた。

「…あの日。階段から落ちた前の行動を言ってくれればいいの。簡単じゃない」

と、智奈は冷蔵庫を開けてから、「ヨーグルト食べる?」

と、咲子に訊いた。

「食べる」

と、ポーズを崩さずに咲子は答えた。

「…あの日。まず、図書室に行つてメモを取つたのよ

「なるほどね」

と、ベッドの横の引き出しをあさりながら、智奈は相づちを打つた。

「…その後、慎吾の部活が終わるまで暇だったから、図書室で携帯をいじつたのよ」

「『図書』室なのにね」

と、小さいプラスチックのスプーンを手に取つて智奈は言った。

「何人か図書室にはいたんだけど、気がついたら誰もいなくて。急に寂しくなつて。時間も丁度よかつたから図書室を出たのよ」

「本も借りずにね」

と、パイプ椅子に座りながら智奈は言った。

「出ると、すぐにメールがきて。読むのに気がをとられて、近くの階段を通り過ぎたのよ。それで、「端の階段でいいや」って思ったの」

「図書室から東端の階段に行くまでの間に、物音とか聞かなかつたの？」

と、智奈はヨーグルトを咲子に差し出して言った。

咲子は、目を閉じていたので、差し出されたヨーグルトに気づかなかつた。

「…2年生の教室が右に並んでるけど、話し声とかは聞こえなかつた気がする。誰もいなかつたんじゃないかな？」

「物音とかは？」

「気づかなかつたわ」

咲子はそう言って、目を開けた。

智奈は再びヨーグルトを差し出して、「…見てないとは思うけど、その時に奥山秋子って先輩見なかつた？」

「誰？那人？」

と、咲子はヨーグルトを受け取つてから、少し考えた様子で、「…奥山。聞いたことはないわ。どんな外見してるの？髪型とか教えてよ」

智奈はヨーグルトのフタを開けてから、「…私も知らない。会つたことないし」

「それじゃ、分からない。知つてたどりで、あの時は人は見なかつたし」

と、咲子はため息混じりに言った。

智奈はスプーンを口元に運びながら、「…咲の彼氏から聞いたこともないわけね？」

咲子は再び手を額に当てて、少し考えてから、「…ないわね」

「…手がかりなし、か」

と、智奈はため息混じりに呟いた。

しばらくの間、智奈と咲子はとりとめのない話をしていたが、智奈の携帯電話が鳴ったことで会話が途切れた。

「栗栖さん。院内は携帯の電源は切つてくださいない？」

と、咲子は髪をかきあげて言った。

「次から気をつけますわ。柿崎さん」

と言つてから、智奈は電話に出た。

「もしもし？」

「あ、智奈？ もみじだよ」

と、もみじの元気な声が応えた。

「何か分かった？」

と、智奈は携帯をいじりだした咲子を見ながら言った。

「まず、結果から言つけど、前田慎吾と奥山秋子に接点はなし！ 小学校も中学も違う学校。住んでる地域も逆方向。もちろん、幼なじみつてこともないよ！」

と、もみじは大きな声で言った。

智奈は電話を耳から少し離して、「部活の接点もないの？」

「うん。部活は中学の時から、お互にサッカーと合唱。だから、地域の大会で会うこともないし！」

智奈は片手でポニー・テイルをいじりながら、「…分かつた。またお願いしたいことがあるんだけどいい？」

「どんなこと？」

「調べてほしいことは2つ。1つは、音楽室は1階にあるのに、何故奥山先輩が1階より上にいたのか。次に、あの時間帯に2年の教室にどれくらいの生徒が残っていたのか

「…うーん。それって重要なの？」

「私にも分からぬ。確認しておきたいだけ。無理かな？」

「いや、まかせなさい！」

と、もみじは楽しそうな声で、「人の噂も七十五日—2ヶ月半の

間に起きたことなら簡単に調べられるわー！」

「ありがと。よろしくね」

そう言って、智奈は電話を切った。

「…柿崎さん。院内は携帯の電源は切らなくてはいけないので
？」

と、智奈は咲子に向かって言った。

咲子は携帯のディスプレイから智奈に視線を移すと、にやつと笑
つた。

「…ひつかつたわね？」

そう言って、咲子は智奈に、電源の切つてある携帯の真っ暗なデ
ィスプレイを見せつけた。

第6章・月沈み酉が夜明けの時告げる

智奈が咲子を見舞いにいった翌日の昼休み。さわついた教室の窓際、最後尾の席について、紙パックのオレンジジュースを飲んでいた智奈に、もみじが駆け寄った。

「ただいま」

と、息をばくませてもみじは言った。

「…おかえり」

ストローから口を離した智奈は、隣の席の椅子を引き寄せているもみじに向かって、「どう? 何か分かった?」

「一口ちょうどいい」

智奈の問いかけに答えずに、智奈の持っている紙パックを見て、もみじは言った。

智奈は無言でパックをもみじに差し出した。

もみじは、パックを受け取ると一口飲み、「昨日、智奈が言つてた2つのこと。両方とも分かったよ」

智奈は少し驚いた様子で、「本当? さすがね」

もみじは得意そうな顔をして、「学内で私に調べられない」とはないよ!」

「それじゃあ、報告してくれる?」

「了解!」

もみじは片手で眼鏡のツルを撫でながら、「…えっと、まずは2年生の教室にどれくらい残っていたか、だつたよね? 答えはゼロ!」

「…ゼロ? 誰も残つてなかつたの?」

と、智奈は眉間にシワを寄せて訊いた。

「智奈、顔が恐いよ」

と、もみじは言ってから、「咲が落つこちた少し前にね、先生達が見回つて教室に残つてゐる人達を帰らせたらしいんだ。もちろん、部活をやつていた人達には関係ないけどね」

智奈はポニー テイルをいじりながら、「…なるほどね。じゃあ、あと一つのほうは？」

「奥山先輩のほうはね、教室に忘れ物したらしくて、取りにいったみたいだよ。合唱部の人があつてた」

「教室にいつたの？」

と、智奈はもみじに訊いた。

「そうだよ」

もみじは答えてから、ツルを撫でるのを止めた。

智奈は何も置かれていない机の表面を睨みつけて、ポニー テイルをいじつていた。

もみじは智奈を見ながら、オレンジジュースを飲んで、「…しかし、また難しくなっちゃったね？教室には誰もいなかつた。咲から聞いた話だと、図書室にも誰もいなかつたって、今朝智奈言つてたよね？」

智奈はもみじの問いに答へずに、机を睨みつけていた。

「そうなると。犯人は通りすがりの人つてなるよね？たまたま、偶然、通りすぎた人。誰もいらないんじや、つけられないしね」

と、もみじはストローをくわえて言った。

智奈はポニー テイルをいじつていた手をとめて、「…そういうことか」と、呟いた。

「どうしたの？」

と、もみじが不思議そうな顔をして言つた。

「…確率の問題。単純な見落とし」

そう言つてから、智奈はもみじを見た。

「…放課後、犯人に会いにいきましょう。それと、そろそろジュース返してくれる？」

放課後、智奈ともみじは図書室にいた。室内には、智奈達の他に女子生徒が一人だけ残っていた。窓の外のグラウンドから、運動部のかけ声が聞こえていた。

智奈ともみじは向かいあつて席についていた。もう1人の利用者は智奈達とは離れた席についていた。

しばらくして、その女子生徒は広げていた教科書やノートをまとめる、バッグに詰め込み、席を立つた。

その動きに合わせるように、智奈達も立ち上がった。

女子生徒は受付の前を通り過ぎ、出入口の引き戸を開けて廊下に出た。

智奈達は女子生徒が廊下に出たことを確認すると、ゆっくりと受付に向かった。

受付では図書室の司書教諭がパソコンに向かって、何やら作業をしていた。

智奈がもみじに目配せをすると、もみじは出入り口の引き戸に近づいて、鍵をしめた。

「…すっかり忘れていたわ。たとえ利用者がいなくとも、図書室が開いている限り、あなたはここにいるってことを」

と、パソコンに向かっている女性に向かって智奈は言った。

まだ若い司書教諭は、眼鏡をかけた顔を智奈に向けた。

「…何を言つているの、あなた？利用者が少ないことの皮肉のつもり？」

と、冷たい響きを感じさせる声で言った。

「違うわ。4日前、先生は柿崎咲子、奥山秋子。以上、2人の生徒を突き落としましたね？」

と、智奈は無表情で言った。

女教師は目を見開いて、キーボードを叩いていた指を硬直させた。

「何を言つてるの？あなたは…」

「あなたしかいないのよ」

と、智奈は教師の言葉を遮つて言った。

「確率の問題よ。咲を狙つたのならつけるか、待ち伏せをしなくてはならない。しかし、咲が出るころには図書室に利用者はなく、最も潜みやすい教室は先生達によつて無人にされていた。あと隠れられるのはトイレだけど、不確定要素が多すぎる。手前の階段で降りられたら、おしまいだしね」

智奈は、そこで言葉を切つて、「…それに、咲が東端の階段を使つたのは偶然。待ち伏せなんて不可能なのよ」

教師は智奈を見つめて、口を一文字に結んでいた。

「時間と、咲が落とされる直前まで図書室が開いていたことを考えると、奥山先輩を先に突き落とすことは不可能。だから、あなたが狙つたのは、あくまで咲一人だつた。おそらく、奥山先輩は現場を目撃したのか、あなたが現場の辺りにいたことを見たがために突き落とされた。そうでしょ？」

「…まるでシャーロック・ホームズね。大した想像力だわ」と、教師は落ち着いた声で言った。

「…私は推理したつもりはないわ。想像したつもりもない。ただ、現実と結果から不可能、不確実なものを消していつただけよ。まあ、奥山先輩が落とされた理由は適当に当てはめてみたけど」と、智奈は相変わらずの無表情で言った。

「…もし、私がその2人を突き落としたとして、証拠はあるの？」と、教師は智奈からパソコンに視線を移して、言った。

「証拠はないけど、証人ならいるわよ」

と、智奈はもみじをちらりと見て言った。

もみじは、今まで黙つてドアの所に立つていたが、「…奥山先輩の悲鳴が聞こえた直後に、渡り廊下を本校舎の方に向かっている先生を見た美術部の生徒がいるんです。その人は、先生が救急車を呼びにいったんだと思つたらしいです」

教師はもみじを見つめた。もみじは教師を見つめ返した。智奈は窓に目を向けた。室内は時を刻む、時計の音とグラウンドからのか

け声が聞こえるだけだった。

長い沈黙の後、女教師はため息をついた。

「… そうか。 美術室を出れば、窓ガラス越しに渡り廊下は見られちゃうのか。あの時はここに帰るのに夢中だったから…」

智奈は教師に視線を戻した。

教師は椅子から立ち上がり、窓に向かつた。

「… 好きだったのよ。前田君のことが、ね」

窓の外を見つめて、教師は言った。

「彼は他の男とは違つたわ。彼には教養と品があった」

智奈ともみじは、窓の外を眺めている教師を、無言で見つめていた。

「彼に彼女ができたことはすぐに分かつた。しかも、教養もなさそうな女。許せなかつた。だから、突き落としたのよ」

「… 奥山先輩はどうして？」

と、もみじが訊いた。

「どうして突き落としたのか？簡単よ。見られたから」

そう言つて、教師は振り返つて智奈達を見た。 「あの女を突き落とした後。ここに戻ろうとしたら、生徒が一人、トイレから出てきて、西棟に向かつて走つてた。見られた、と思つたわ。だから、追いかけて突き落としたのよ」

智奈はドアに近づくと、鍵を開けてドアの取つ手に手をかけた。

「… 他人の色恋にそれほど興味はないわ。あなたのミスは、『私の』ノートを持つてる咲を突き落としたこと。選んだ日、タイミングが悪かったのよ」

そう言つてから智奈は引き戸を開けた。

「… まあ、持つてなくとも調べたけどね」

と、智奈は振り返つて言つと、図書室を出た。

HΠローグ

「戦場において補給線がたたれることは、すなわち敗北を意味する。それ故に、補給線を確保し、維持することが戦況を大きく左右するのだ！」

と、ビールのグラスを片手に栗栖平八郎は黒い子ネコに向かって、言つた。

「ニヤ」

トーファは栗栖を見上げて、短く鳴いた。

「お父さん。恥ずかしいから、もっと声を小さくして」と、栗栖知亜乃が父親を冷たく見て言つた。

智奈達の学校の定期試験が終わった日、咲子の退院祝いが栗栖一家ともみじによつて、居酒屋『夜桜』で行われていた。店内は3分の2ほどの席が埋まつていて賑やかだったが、智奈達が陣取つていた奥の座敷が最も騒がしかつた。

「マスター。次は焼酎！ボトルで持つてきて！」

と、徳利を振りながら栗栖麻紀は言つた。

「マスター！ボトルは2本ね！あと、氷もちょうだい」と、知亜乃が追加した。

「…相変わらず、元気ね。智奈の家族は」

と、ギップスをつけた片足を伸ばして座つていた咲子は、烏龍茶を片手に言つた。

「そうだよね。智奈からは考えられないくらい元気だよ」と、焼き鳥を頬張りながらもみじは言つた。

智奈は無言で、オレンジジュースの入つたグラスを傾けた。

もみじは、焼き鳥の串を皿に置いてから、「…そう言えば、司書

教諭の月岡先生、学校辞めたらしよ

ツキオカ

智奈はグラスをテーブルに置いて、「…そう」と、呟いた。

咲子は曖昧な表情をして、「まあ、私も脚折ったけど、命に別状はなかつたし、奥山って先輩も意識は戻つたらしいし。多少は気まずいけど、辞めることはなかつたんじゃない?」

もみじは驚いた顔をして、「寛大だね」

「恋と戦争は手段を選ばない、つていうじゃない?」

と、咲子は髪をかきあげて言った。

「何? 戦争?」

「お父さん。グラスが空よ」

と、智奈は父親にビールを注いでやりながら言った。

「まあ、智奈にばれちゃつたし。居づらくなつたんだよ。きっと」と、もみじは唐揚げに箸を伸ばして言った。

「お待たせ! 焼酎、2本! あと、氷ね!」

と、熊のような風貌をしたヒゲ面の『夜桜』のマスターが、ボトルと氷の入ったバケツを持ってきた。

麻紀が嬉しそうな表情で氷をグラスにいれた。知亞乃が何事かをマスターに耳打ちすると、マスターは楽しそうに頷いてキッキンに戻つていった。

「…智奈にばれたつて言つても、証人がいるつて話は『ハツタリ』だつたんでしょう? それに、奥山先輩は現場を見たのか、見なかつたのかは分からんんでしょ?」

と、咲子は、仲良く焼酎を注ぎあつて居る知亞乃と麻紀を眺めて言った。

「奥山先輩が見たのかどうかは分からんわ。でも、『ハツタリ』は『ハツタリ』でも、自信のある『ハツタリ』よ」

と、智奈は座布団に座り直して言った。

「奥山先輩が落とされてから、発見までの時間は短かつた。逃げられる所は5つ。西棟の3階に逃げるか、転げ落ちた奥山先輩の横を通つて1階に逃げるか。美術室の方に逃げるか、本校舎の方に逃

げるか…」

「それから、最後の1つは階段横のトイレに逃げ込むか、だよね？」

と、もみじが焼酎のボトルをまじまじと見ながら、智奈の言葉を引き受けた。

智奈は頷くと、「3階に逃げると、部活動をしていた生徒達に見つかる。1階に行つても同じ。美術室の方に逃げないのは疑問の余地はない。あと逃げ込むのはトイレだけど、大騒ぎしてる現場の真横に長居できる? そうなると、残るは本校舎の方向」

「なるほど」

と、咲子は相づちを打つてから、「そうなると、一番西棟に近いのは図書室。逃げ込むとしたらそこか」

「そうこう」と

そう言つてから、智奈は麻紀に向かつて、「お母さん。それ、一口ちょうだい」

「強いわよ。止めたほうがいいと思うけど?」

と、言いながら麻紀は焼酎のグラスを智奈に渡した。

智奈は一口飲むと、顔をしかめた。

「…ビールよりは美味しい」

そう言つと、智奈は麻紀にグラスを返した。

「まだ早いわよ。もつとお酒に慣れてからになさい」

と、微笑んで娘に言つと、麻紀は焼酎を一気に飲み干した。

「…あんなに飲むのに、どうして智奈のお母さんって痩せてるのかしら?」

と、咲子は首を傾げて言つた。

「お父さんも太つてないし、頭もさびしくないよね。背も高いし」と、もみじはトーファに熱弁をふるつ栗栖を見ながら言つた。

「お姉さんは格好いいし」

「その上、かわいいし」

「…もう止めてよ。恥ずかしい」

と、智奈は、咲子ともみじの『褒め合戦』を制止して言った。

「…そりいえば、咲。彼氏とはどうなったの？」

と、もみじは咲子を見て言った。

咲子は烏龍茶のグラスを飲み干して、「…別れたわ

「嘘！」

もみじは焼き鳥を食べようとしていた手を止めて、「どうして？」

「…いい加減に、文学的恋愛にも飽きたの。だつて、あれは私に夢中なのか、口説いてるに自分に夢中なのか分からなかから」

そう言つてから、咲子はギプスを軽く叩いて、「脚が治つたら、また新しい恋でも見つけるわ」

もみじは感心した表情で、「タフね」

「何？咲ちゃん、彼氏と別れたの？」

と、話に気づいた知亜乃が、焼酎を片手に話しかけてきた。

「ええ。そうなんです。知亜乃さん」

と、咲子は悲しそうな表情をつくつて言つた。

知亜乃是咲子の頭を撫でてやりながら、「よしよし。そんなあなた達に、お姉さんからプレゼントがあるの」

「あなた『達』って、私ともみじは関係ないじゃない」

と、智奈は訂正した。

「細かいことは気にしない」

そこに『夜桜』のマスターが銀のトレイに3つのカクテルグラスをのせてやってきた。マスターが智奈達『未成年』の前にグラスを置くのを見ながら、「このカクテルはノン・アルコール・カクテル。アルコールは入っていないわ。入つてるのはオレンジジュース、レモンジュー、パイナップルジューの3つ」

「甘くて美味しい！」

もみじは一口飲むと、「知亜乃さん。『ノン、何て名前ですか？』

知亜乃是焼酎のグラスを口元に運びながら、色っぽく微笑んで、

「…シンデレラ・カクテルよ」

「シンデレラ…」

「また、随分とクラシックね」

一口にグラスを飲み干した智奈は、そう言ってから、マスターに向かつて言った。

「…マスター。テキーラ・サンライズをちょうどいい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4881d/>

それは偽りの月のように。

2010年10月17日06時31分発行